

## 第 11 冊

### 『蘇我氏～古代豪族の興亡』

倉本一宏、中公新書、2015年

(中)

## 大化の改新？

推古34年（626）5月20日、蘇我馬子は亡くなりました。『扶桑略記』に76歳と記載されているので、**大臣に就任して以来、50年以上も政権の座にありました。**そして、東アジア激動の6世紀後半から7世紀初頭の政治を担ってきました。50年以上も政権のトップに居続けるという人物は長い日本の歴史でもそうそういないですよ。 「50年」で真っ先に思いつくのは、摂関政治期の藤原道長・頼通親子、それに江戸幕府11大將軍徳川家斉です。

そこで、質問です。**蘇我馬子の墓と考えられる遺跡は何でしょうか？**

答えは、**飛鳥にある石舞台古墳**ですね。

そして、今度は推古天皇が亡くなります。馬子の墓の造営が続く中、推古36年（628）2月に病に倒れてしまいます。そして、3月6日には非蘇我系嫡流の田村王と蘇我系嫡流の山背大兄王に対して、それぞれ「遺詔」を残し、翌7日に亡くなりました。75歳、36年間の在位でした。

蘇我馬子といい、推古天皇といい、当時としては長寿の人物と言えますね。



石舞台古墳（ウィキペディアより）

## 蘇我一族の確執

蘇我氏は稲目と馬子の代で「盤石な体制」を整えていました。そのあたりのことを、倉本一宏氏は『蘇我氏～古代豪族の興亡』で以下のように述べていられます。

蘇我氏同族集団は、それぞれが代表をマハツキミとして、氏族合議体に参加させた。元々マハツキミ会議は各氏族から1人ずつが出て、倭王権の重要事項を議定するものであった。稲目の代には、馬子は若年であったため、大臣（オホマハツキミ）の稲目一人が議長を務めるのみであった。馬子の代になり、大臣馬子の他に蝦夷が合議体に加わり、蘇我氏から二人の参議者が出るに至ったのであるが、それでも蘇我氏だけで合議体を制覇するほどの数ではなかった。

蘇我氏が多くの同族氏族を独立させ、それぞれの代表を合議体に参加させるというのは、軍事的・経済的理由のみならず、マハツキミ会議を制覇するという政治的な目的もあったのではないかと思われる。

稲目の代に蘇我氏から分かれたと思われるのは河辺氏のみであり、マハツキミ会議に参議していた可能性が高いのは河辺瓊伍のみである。やはりまだ、蘇我氏同族氏族の権力は万全とは言いがたかったことが窺えよう。

馬子の代になると、蘇我倉麻呂（雄当）、境部摩理勢、田口（読みがわからない）、桜井和慈古、高向猪子、田中臣（欠名）、小治田臣（欠名）、河辺（示す偏に）璽受、岸田耳高、来目臣（欠名）などが、マハツキミ会議に参加した可能性が高い。

マハツキミ会議全体の構成員の数は、なかなか明らかにしがたいのであるが、かつて集計したところでは、欽明の代から崇峻の代までは、17の氏族から各ター人ないし二人のマハツキミが出ていた。ところが、推古の代以降は、蘇我氏から常時2、3人の官人が合議体に加わり、しかも蘇我氏同族の官人が合議体構成員となって、合わせて概ね3分の1を占めるに至っている。

蘇我氏はここに、大臣馬子を中心とし、マハツキミ会議の構成員に同族の官人を大量に送り込み、本宗家は大臣として会議を主導することによって、新たな権力集中を果たしたのである。

蘇我氏でマハツキミ会議の3分の1を占めるってことは、蘇我馬子を中心として蘇我氏集団による倭国の政権掌握が実質的に完成していたと言えます。ただし、一方で、蘇我氏の同族の氏族を独立させて、他のマハツキミ氏族と同様の権限を持たせるということは危険性を併せ持っているということでもあります。

どんな危険でしょうか？ それは、蘇我氏同族の人々が蘇我本宗家の規制を外れて、独立した政治的な動きを始める危険性が発生した、ということでもあります。

例えば、それぞれが別個の氏寺を建立するというのも、飛鳥寺に結集せずに独立性を主張したものと考えられますし、蘇我倉山田石川麻呂の山田寺などは、飛鳥寺や豊浦寺系の瓦を使用するのではなく、百済大寺系の瓦を使用するなど、独自性を打ち出しているそうです。

倉本一宏氏は次のように述べています。

特に河内を本拠地とする氏族は、本宗家から独立した立場を取ることが多かった。そして推古死去後の大王選定や、山背大兄王討滅、そして乙巳の変に際して、その危惧はすぐに表面に現れてくる。

兄弟相承による当時の氏上（うじのかみ）継承の慣行に反して、稻目一馬子一蝦夷一入鹿と嫡系の本宗家確立によって氏上を継承していったことに対する反発が、独立した蘇我氏同族氏族の中に、強くわだかまっていた。

「巨星」とも言うべき人物が相次いで亡くなってしまったので、後継者はその調整能力が問われますよね。

蘇我馬子の跡を継いで蘇我本宗家の氏上になり、大臣となったのが蘇我蝦夷でした。彼の最初の大仕事は推古天皇の後継者を選ぶことでした。候補者は二人いました。一人は敏達天皇の孫の田村王で、二人目は厩戸王子の子の山背大兄王でした。

蘇我蝦夷が大夫会議に諮ったところ、田村王支持が5名、山背大兄王支持が3名でした（蝦夷の弟の倉麻呂は保留）。

この判断は蘇我本宗家として好都合だったと思います。なぜかということ、田村王と馬子の娘の法提郎

女（ほてのいらつめ）の間には古人大兄王子が生まれていたからです。一方、同じ蘇我系である山背大兄王についてはあまり評価されていなかったようです。

こうして、田村王が即位し、**舒明天皇**が誕生することになりました。

ところが、馬子の弟で蝦夷の叔父にあたる**境部摩理勢**（さかいべのまりせ）と蘇我本宗家との対立が大きくなりました。というのも、境部摩理勢は生前の聖徳太子と仲が良く、山背大兄王を推していたからです。

そして、蘇我蝦夷と境部摩理勢の対立は武力衝突に発展し、結果的には、蘇我蝦夷が派遣した軍が境部摩理勢を殺害して鎮圧しました。

この事件は、蘇我本宗家と他の蘇我一族の間に大きな溝を作ってしまうことになってしまいました。こういう情勢のもと、大事件が引き起こされてしまいました。

## 乙巳の変

さあ、いよいよ「乙巳の変」です。720年に編纂された**日本初の正史である『日本書紀』**には、どのようなことが書かれているのでしょうか？

『日本書紀』よれば、**蘇我蝦夷**の代になると蘇我氏の専横ぶりが目立っていったといえます。皇極元年（642）、蘇我蝦夷と**その子・入鹿**は、自らの墓を造営し、その墓を「陵（みささぎ）」と呼ばせ、国中の民を徴用して使役させたといえます。

皇極2年（643）には、蘇我蝦夷が天皇に無断で紫冠を入鹿に授け、大臣の位を譲ってしまいました。

643年11月には**上宮王家襲撃事件**が起きました。父・蝦夷の跡を継いだ蘇我入鹿は、**巨勢徳太（こせのとくだ）**らを派遣して、斑鳩宮の**山背大兄王**を襲わせました。山背大兄王とその一族はいったん生駒山に逃げましたが、斑鳩寺（法隆寺）に戻ったところを、蘇我入鹿が派遣した兵に囲まれ、一族そろって首をくくって自害して果てたといえます。

皇極3年（644）、蘇我蝦夷と入鹿は甘樫丘（あまかしのおか）に邸宅を並べて建て、「上の宮門（みかど）」「下の（谷の）宮門」と称しました。さらに、蘇我入鹿は自分の子らを「王子」と呼ばせたといえます。これらの館には城柵が造られ、門のわきには武器庫が設けられました。そして、武器を持った屈強な兵たちに守らせていたといえます。さらに、畝傍山の東にある蝦夷の館でも、池を掘って砦を造り、武器庫を建てて矢を積んでいたといえます。また、蝦夷は常に50人の兵士を連れて身辺の警護をさせていたといえます。

うーん、『日本書紀』って、「これでもかこれでもか」と蘇我氏の専横ぶりを書き連ねていますね。特に、「聖徳太子」の息子・山背大兄王とその一族をことごとく殺してしまった蘇我入鹿は、王家をないがしろにする、不敬極まりない、とんでもない大悪党ということになります。また、蘇我氏の武装化が、天皇家を滅ぼし自らがその権力の座にとって代わろうという「野望」を持っていたと主張しています。

さて、上記の蘇我氏の専横に対して、ついに立ち上がった人物がいます。誰でしたっけ？

**中大兄皇子（のちの天智天皇）と中臣鎌足（藤原氏の祖）**ですよね。この二人が中心となって蘇我本宗家滅亡計画を企てました。

中臣鎌足と中大兄皇子は、遣隋使から帰国した**南淵請安**のもとに通い儒学を学びながら、蘇我体制打倒の策を練っていきました。さらに鎌足は、蘇我一族である**蘇我倉山田石川麻呂**を調略し、その娘である越智娘（おちのいらつめ）を中大兄皇子の後に迎えさせ、石川麻呂を仲間に引き入れます。蘇我一族内部にくすぶっていた対立関係をうまく利用した形です。かくして、蘇我本宗家（蝦夷、入鹿の家系）滅亡作戦の準備が整いました。

皇極4年（645）6月12日、**三韓の儀**が飛鳥板蓋宮で行われました。この儀式には皇極天皇、古人大兄皇子も参加し、当然ですが大臣の蘇我入鹿も出席していました。

入鹿が宮城内に入ると（この時、入鹿の持つ刀を上手に取り上げて「丸腰」にしています）、中大兄皇子は12の門すべてを配下に命じて閉めさせました。蘇我倉山田石川麻呂が上表文を読み始めますが、入鹿に斬りかかる手はずだった子麻呂と網田の二人とも緊張のあまり体が動きません。上表文を読んでいた石川麻呂も、二人が予定通り動かないので緊張のあまり声が震えてしまいました。

事態が動かないことに業を煮やした中大兄皇子が、入鹿に突進して頭と肩を剣で斬り割きました。入鹿が立ち上がろうとすると、子麻呂が入鹿の片脚を斬りました。入鹿は、皇極天皇の前に倒れながらも、「自分が何の罪で誅されるのか」と聞きました。

すると、中大兄皇子は、「鞍作（入鹿）は皇族を滅ぼしつくし、皇位を絶とうとしております。鞍作のために天孫（皇族）が滅びるようなことがあってよいものでしょうか」と答えたといひます。その後、皇極天皇が宮殿の中に入ると、子麻呂と網田が入鹿に斬りかかり、とどめを刺しました。

入鹿を暗殺した中大兄皇子らは、甘樫丘の蝦夷邸に入鹿の遺骸を届けさせました。これを見た蘇我氏の忠臣・東漢氏（やまとのあやし）らは郎党を集め、戦いの準備をしますが、中大兄皇子は將軍・巨勢徳太を蝦夷邸に派遣し説得したといひます。

あれっ、巨勢徳太って、入鹿の命令で上宮王家襲撃を直接実行した人物じゃなかったですか？今度は入鹿の味方ではなく、中大兄皇子の味方になっているのですね。なんか、うさんくさい気がします。

結局、東漢氏らは説得に依じて武装解除したため、蘇我本宗家の命運は尽き、蘇我蝦夷も自刃し、ここに4代（稻目・馬子・蝦夷・入鹿）100年にわたって権力の座をほしいままにしてきた蘇我本宗家は

滅びてしまいました。



「蘇我入鹿暗殺の図」談山神社（ウィキペディアより）

この一連の事件を何と呼ぶのですか？

そう、「乙巳の変」と呼びますね。

『日本書紀』は、蘇我氏が皇位篡奪を企てた極悪人であると断言しています。それを証明する数々の専横ぶりが紹介されていました。はては、聖徳太子の子・山背大兄王はじめ上宮王家滅亡を企てた極悪人として非難していたのです。

しかし、どう考えてもおかしいですね。だって、**天皇家に蘇我氏の娘を娶らせ、産んだ子どもを天皇につかせる外戚政策を実行し、天皇の権威を利用して政治の実権を握ってきたのが蘇我氏の戦略**でした。自らが「天皇家にとって代わる」必要もないし、そんな妄想を抱くはずがないのです。

『日本書紀』では、上宮王家襲撃事件は蘇我入鹿が独断で起こしたことになります。ところが、奈良時代に**藤原仲麻呂**が編集した藤原鎌足・不比等親子の伝記である『**藤原家伝**』では、入鹿が諸皇子とともに謀って起こしたものだといいます。

他の資料（『聖徳太子伝略』）にも、軽皇子（のちの孝徳天皇）、巨勢徳太、大伴長徳らとともに計画したとあります。

また、事件の原因について『日本書紀』では、入鹿が上宮王家を廃して古人皇子（舒明天皇と馬子の娘・法提郎女の子）を擁立しようとしたためと記述されています。

しかし、この時点での古人皇子の最大のライバルは、山背大兄王ではなく舒明天皇と皇極天皇との間に生まれた葛城皇子（中大兄皇子）でした。

ですから、天皇后継争いのために山背大兄王を殺害したという理由もおかしいです。

さらに、軽皇子はじめ多くの重臣が山背大兄王襲撃に加わっていたのですから、政府内部の権力争いの一環と考えるべきで、蘇我氏が天皇家乗っ取りのために仕組んだ事件とは到底思えません。

実は、上宮王家襲撃事件は、『日本書紀』の創作だったのではないかという説もあります。なぜなら、事件の現場となった法隆寺では、平安時代に至るまで上宮王家一族を祀った形跡がないといひます。さらに、何十人もいたはずの一族の墓がどこにも見当たらないのです。

ですから、上宮王家そのものも実は存在せず、『日本書紀』の編者が蘇我氏の悪行をことさら強調し、政治家としての実績をはく奪し、すべて聖徳太子が行ったことにするために作り上げた幻の王族だったというのです。

これは極端な意見ですが、中臣鎌足や中大兄皇子ならやりかねない、という気もします。

また、上宮王家襲撃事件をことさら蘇我氏の専横と強調するのならば、乙巳の変で入鹿が暗殺された際、軽皇子（のちの孝徳天皇）、巨勢徳太、大伴長徳らは、なぜ、処罰されなかったのでしょうか？いや、それどころか、軽皇子は孝徳天皇になりましたし、しばらくして、巨勢徳太は左大臣に、大伴長徳も右大臣に就任しているのです。これって、山背大兄王暗殺の論功行賞でなくてなんでしょう？なぜ、入鹿だけが死ななければならなかったのでしょうか？

要は中大兄皇子や中臣鎌足にとって一番手強い相手である蘇我入鹿を標的にして暗殺し、利用価値のある連中には餌をちらつかせながら、自分たちが権力を奪取していった、と言えるのではないのでしょうか。ただし、利用した連中も謀略により抹殺していきましたが。

**乙巳の変**というクーデターは、一般には**中大兄皇子（蘇我氏濃度0）**が蘇我蝦夷・入鹿といった蘇我氏本宗家を倒すことを目的としたものと考えられています。

しかし、これまでの大王継承の流れから考えてみると、同時に中大兄皇子の標的が蘇我系嫡流の**古人大兄王子（この人物は蘇我氏濃度2分の1）**にもあったことは明らかです。

また、大臣（オホマヘツキミ）蝦夷の後継者が入鹿となったことに対する、**蘇我氏同族の氏上（うじのかみ）争い**といった側面も見られます。むしろ、中臣鎌足が氏上と大臣の座を餌に、蘇我倉山田石川麻呂や阿倍内麻呂を誘い込んだと言えます。

さて、中大兄皇子や中臣鎌足にとって「抵抗勢力」と言える蘇我本宗家を滅ぼした後、中大兄皇子を中心に「大化改新」が進められていきました。でも、「大化の改新」って、何でしょうか？

蘇我氏は律令制度導入に反対だったのでしょうか？中臣鎌足や中大兄皇子が蘇我入鹿を倒そうとした本当の目的は何なのでしょう？

それを考える前に、まずは**皇極天皇が生前譲位**し、孝徳天皇が誕生した大化の改新政府について、おさらいしておきましょう。

Q1. 都が飛鳥から変更されました。どこに移ったのでしょうか。

Q2. 左大臣・右大臣に就任した人物は誰でしょうか。

Q3. 遣隋使に派遣され、国博士に就任した人物を二人答えてください。

Q4. 中臣鎌足が就任した官職は何でしょうか。

Q5. 大化2年（646）正月に発布された新政府の4つの方針を総称して何と呼びますか。

A1. 難波長柄（ながら）豊碓（とよさき）宮でしたね。

A2. 従来の大臣・大連が変わって、左大臣は阿倍内麻呂、右大臣は蘇我倉山田石川麻呂が就任しました。

A3. 高向玄理（たかむこのくろまろ）と旻（みん）の二人でした。

A4. 内臣（うちつおみ）です。

A5. 「改新の詔」でした。

乙巳の変は大変革をもたらしますが、何と言っても**皇極天皇による史上初の「譲位」**が行われたことは特筆すべきことの1つですね。その結果、非蘇我系王統庶流の軽王＝**孝徳（蘇我氏濃度は0）が天皇に就任**します。

当時の慣例として、未だ20歳に過ぎない中大兄皇子が即位するわけにはいかず、また古人大兄王子が存在する中での世代交代を避け、50歳の孝徳天皇の即位が実現したのでした。

ところで、乙巳の政変により「蘇我氏は滅んだ」と言われますが、正しくないですね。確かに、乙巳の変で蝦夷・入鹿といった**蘇我本宗家が滅亡**しましたが、大臣（オホマヘツキミ）家としての蘇我氏の権威は揺らぎませんでした。蘇我本宗家は滅びましたが、蘇我氏一族すべてが滅んだわけではありません。入鹿暗殺に加担した蘇我倉山田石川麻呂が属する蘇我倉氏（河内を地盤とする）が蘇我一族の中心的存在となり、政権の中枢に参加することになりました。

「乙巳の変」の1つのポイントは、**蘇我氏の氏上を出す家が蝦夷・入鹿といった本宗家から石川麻呂を擁する蘇我倉氏に移動した**に過ぎないということです。また、**蘇我氏同族氏族からもそれぞれマヘツキミが出るという、推古の代以来の体制も乙巳の変以後に変わるところはありません**でした。

倉本一宏氏の『蘇我氏～古代豪族の興亡』では次のように述べていられます。

孝徳の代に見える21氏33人のマヘツキミのうち、蘇我系の官人は6氏8人を占め、推古の代以来の割合をほぼ維持していた。

その内訳は、蘇我倉氏が石川麻呂（右大臣）と日向（筑紫大宰帥）、河辺氏が百依（ももより、肩書略、以下同じ）と磯泊（しはつ）、磐管（いわつつ）、湯麻呂・・・、高向氏が国押、田口氏が筑紫、久米氏が欠名、岸田氏が欠名、・・・といったところだ。

上記のように、蘇我本宗家は滅びましたが、蘇我氏は馬子の世代以来、いくつもの系統や同族氏族に分かれ、それぞれが独立性を有していましたが、**蘇我本宗家が倒された後も、他の家や同族氏族はいずれも「改新政府」に重用された**ことがわかります。

それだけではありません。**蘇我氏出身の女性が大王家のキサキになるという状況も続きました**。蘇我氏の血を引く王族は、奈良時代半ばに至るまで、重要な位置を占めることとなります。

## 「改新」＝「邪魔者は消せ」！？

『日本書紀』では蘇我本宗家の「悪逆非道」な行為が、「これでもか、これでもか」と列挙されています。それらの全てが事実なら、蘇我氏は「悪の権化」といっても仕方がないと言えます。

でも、『日本書紀』に関わらず歴史書ってすべて「勝者が書いたもの」ですよ。敗者の気持ちや業績などは一顧だにされません。

むしろ、真実は全く逆で、中大兄皇子や中臣鎌足が悪逆非道な行いを計画し、実行に移した張本人だったのではないのでしょうか。「悪の権化」とは、まさに中大兄皇子や中臣鎌足二人にぴったり当てはまる言葉ではないのでしょうか。

『日本書紀』のなかで、二人が関与した事件を、具体的にみていきましょう。

### ①古人大兄皇子・・・「乙巳の変」勃発により皇位に就けず、最後は異母弟に殺害される

古人大兄皇子（ふるひとのおおえのみこ）の母は蘇我法提郎女（ほてのいらつめ）で、舒明天皇の第一皇子でしたから、もう少し早く生まれていたら、皇位に就いていてもおかしくない人物でした。古人大兄皇子の生年は不詳、615年（推古23年）ごろともいわれます。没年は645年（大化元年）。娘に天智天皇の皇后となった倭姫王がいます。古人皇子・古人大市皇子、吉野太子とも称されました。

目の前で蘇我入鹿が暗殺されてしまうというショッキングな事件に出くわした古人大兄皇子は私宮（大市宮）へ逃げ帰り、「韓人が入鹿を殺した。私は心が痛い」と言ったとの記録があります。入鹿が殺害されたとの知らせを受けて、入鹿の父、蝦夷も抗戦は利なしと判断。蝦夷は自邸を焼いて、自殺しました。こうして栄華を誇った蘇我本宗家は滅亡してしまい、頼みとする後ろ楯を失ったのです。

「乙巳の変」後、古人大兄皇子には次から次に、巧妙な“魔”の手が襲い掛かりました。皇極天皇の後を受けて皇位に就くことを勧められました。だが、これを“畏”と見た古人大兄皇子は、それを断り、出家して吉野へ隠退しました。

ところが、追撃の手が緩められることはありませんでした。吉備笠臣垂（きびのかさのおみしだる）が、古人大兄皇子が蘇我田口堀川などと改新政権の転覆を企てっていると密告したのです。これを受けて大化元年（645）9月には、中大兄皇子は兄である古人大兄皇子に追っ手を差し向け、その刺客により殺害されてしまいました。

以上のように、古人大兄皇子は、最後には出家し、吉野に隠退しても、異母弟中大兄皇子の「魔の手」から逃れることはできず、不幸にも中大兄皇子が差し向けた刺客に殺害されてしまいました。彼の時代は乙巳の変で蘇我本宗家が滅亡した時期と重なったために、悲劇的な最期を遂げることになってしまったんですね。

### ②蘇我倉山田石川麻呂・・・乙巳の変の功労者、弟の密告で失脚、妻子8人とともに山田寺で自殺！！

蘇我倉山田石川麻呂といえば、蘇我本宗家をつぶすために蘇我入鹿暗殺計画に協力した人物でした。入鹿を暗殺後、蘇我倉山田石川麻呂は新たに即位した孝徳天皇のもとで、右大臣に任命されました。

ところが、出世した蘇我倉山田石川麻呂が妬ましかったのか、その異母弟である蘇我日向（ひむか）が、「石川麻呂は、皇太子が海辺に遊覧にでかける時をねらって暗殺しようと考えている」と中大兄皇子に密告したのです。

中大兄皇子は孝徳天皇に伝え、天皇は使者を石川麻呂のもとに派遣して、どういうことかと問いただします。

しかし、石川麻呂は、「天皇に会わせてくれ」と言うばかり。

孝徳天皇はこの願いを聞き入れず、ついに兵を派遣しました。蘇我石川麻呂は、現在の奈良県明日香村の山田寺に逃げ延びます。そして、大化5年（649）、妻子8人とともに蘇我石川麻呂は自殺してしまいました。

ちなみに、石川麻呂は首をくくって亡くなったのですが、縄を切って宙に浮いている死体を床に落とされ、首と胴体を切り離され、首を太刀の先に差し上げられたそうです。

ところが、です。石川麻呂の自殺後に詳しく調べてみると、彼に謀反の企みなどなかったことがわかったのです。えーっ、どういうことでしょうか?!なんで、テトラメの密告で、乙巳の変の功労者、蘇我倉山田石川麻呂は殺されなければならなかったのでしょうか?

中大兄皇子はなぜ、蘇我日向の密告をあっさり信じ、天皇に伝えたのでしょうか?いや、密告をほとんどだと思っていたのかどうかも怪しいですね。

それが証拠に、この後、密告をした蘇我日向は筑紫大宰府に左遷させられます。石川麻呂の異母弟日向は中大兄皇子にまんまと踊らされ、兄殺しを手伝った上に、都から追放されたのです。

これで、蘇我本宗家が滅亡し、馬子の息子倉麻呂の子どもである蘇我倉山田石川麻呂が殺され、石川麻呂の弟日向は都から追放され、蘇我氏の立場はいよいよ怪しくなっていきます。

ところで、そもそも中大兄皇子にとって石川麻呂は、入鹿暗殺計画の協力者でした。蘇我本宗家打倒という大事業を実行する時には石川麻呂の勢力・人望が必要でした。しかしながら、大化の改新が一段落をつけた今となつては、石川麻呂の存在は中大兄にとって邪魔以外の何ものでもないということになってしまったのでしょ。

なお、中大兄皇子の妃の一人である遠智娘(おちのいらつめ)は、悲しみの余り亡くなってしまいました。自分の父を自分の夫が殺したようなものですから、相当ショックですよ。可哀相としか言い様がありません。



興福寺仏頭（蘇我の倉山田石川麻呂が創建した山田寺の本尊、ウィキペディアより）

あ、そうそう、左大臣阿倍野内麻呂が亡くなり、同じ年に蘇我倉山田石川麻呂が謀殺されてしまったので、左右の大臣職に空きが出ます。

その結果、あの人たちが左右大臣に就きます。山背大兄王襲撃に加わっていた人物ですよ。

そう、巨勢徳太が左大臣に、大伴長徳が右大臣になったのです。大伴長徳は大伴旅人のおじいちゃんです。

### ③有間皇子・・・父孝徳天皇は憤死、有間は讒言により殺される悲劇！！

乙巳の変のあと、**皇極天皇は弟の軽皇子に皇位を譲りました。何天皇でしたっけ？**

**孝徳天皇**でしたね。孝徳天皇の皇后には中大兄皇子の妹の間人皇女（はしひとのひめみこ）がなりました。

孝徳天皇が難波長柄豊碕宮に都をうつして8年後の白雉4年（653）、中大兄皇子は、都を飛鳥に戻すことを勧めましたが、孝徳天皇は聞き入れませんでした。そして、中大兄皇子は天皇を残して、皇后をはじめ多くの人々を引き連れて飛鳥へ帰ってしまいました。孤立した孝徳天皇は煩悶のあまり1年後に妃の小足媛（おたらしひめ）とその間に生まれた有間皇子を残して崩御されました。

何気なく書いてきましたが、これっておかしいんです。なぜなら、中大兄皇子はせっかく建設した難波長柄豊碕宮を、完成したにもかかわらず捨ててしまったのですから。「改革派」の中大兄皇子は律令

制導入を本格的に進めようとしたからこそ、都を建設したはずだからです。ところが、その新都を捨てたのです。これこそ、彼が律令制度導入の改革を本気で考えていない証拠と言えます。要するに、中大兄皇子に「改革」の意志はなかった、ということではないでしょうか。

孝徳天皇が亡くなったあと、皇極天皇が**重祚**して**斉明（さいめい）天皇**となりました。不思議なことに皇太子中大兄皇子は天皇にならなかったのですね。

一方、孝徳天皇の遺児有間皇子は6歳で、皇太子である中大兄皇子と並ぶ皇位継承の有力者でした。いわばライバルですよ。

『日本書紀』によれば、有間皇子は病気であるように装ったといいます。

そりゃそうでしょう。中大兄皇子（や中臣鎌足）のやってきたことを考えれば、目立ってはいけません。「触らぬ神に祟りなし」ということで、病人のまねをし続ける以外になかったのかもしれない。

斉明天皇は孫の建王（たけるのみこ）をわずか8歳で亡くし、哀しみに沈んでいました。有間皇子の勧めで皇太子以下を引き連れて牟婁の温湯（現在の和歌山県白浜温泉）に行幸しました。事件はその留守中に起こってしまいます。

『日本書紀』によれば、蘇我馬子の孫にあたる留守官の**蘇我赤兄**が有間皇子邸を訪れ、天皇の**三つの失政**をあげて謀反をそそのかします。

「大きな倉庫（くら）を建てて、人民の財物を集積することがその一」  
「延々と水路を掘って、公の食料を消費することがその二」  
「舟に石を乗せて運び、それを丘のように積み上げることがその三です」

有間皇子は翌々日には赤兄の家に行き、謀議をめぐらしたといいます。その時、有間皇子の脇息（きょうそく）が折れたのを不吉の前兆として、拳兵することを断念しました。しかし、その夜半、皇子の邸を赤兄の兵が取り囲み、皇子は捕らえられ、共謀者4人とともに牟婁の温湯に護送されてしまいました。

牟婁の温湯に到着した有間皇子を待っていたのは中大兄皇子の厳しい尋問でした。「なぜ謀反を企てたのか」との問いに有間皇子はただ一言、「天と赤兄が知っている 私は何も知らない」とだけ答えたといいます。

そして、再び都へ送還されることになりますが、藤白の坂（現在の和歌山県海南市藤白）で絞首させられ、孝徳天皇の遺児有間皇子は19歳の若い命を散らしたのです。

こうやって見てくると中大兄皇子のやり方ははっきりしていますね。自分たちが**権力を握りつづけるためには、「邪魔者は消せ」**だということです。利用する者は利用しますが、価値がなくなると関係を

断ち切り、強引にでっち上げ事件を作り上げ、ターゲットの人物を罪人に仕立て上げて、抹殺していったのでした。

私が大兄皇子（と中臣鎌足の二人）を「悪の権化」と呼ぶ理由をわかっていただけましたでしょうか？

#### ④間人皇女・・・中大兄皇子の同母同父の妹、孝徳の皇后と近親相姦？！

もう1点、補足しておきましょう。

一説に、中大兄皇子は同母同父の妹である間人皇女と近親相姦の関係にあり、その関係は孝徳天皇の皇后となった後も続いていたといえます。そして、ついに孝徳天皇から間人皇女を奪って飛鳥へ戻ったというのです。

この説が事実かどうか、私にはわかりません。何でも自分の思い通りにしたい中大兄皇子のことですから、有りそうなことだと思います。はっきりしているのは、間人皇女が亡くなってやっと中大兄皇子は天智天皇になった、ということでした。

## 「改新」どころか失政!?

さて、孝徳天皇が亡くなった後、中大兄皇子は天皇になら（れ）ず、母が斉明天皇として再び天皇位に就きました。この時、斉明天皇は62歳でした。さて、一度天皇を退位した後に、再び即位することを何と言いましたっけ？

そう、**重祚（ちょうそ）**といえますね。

では、**重祚した天皇はもうひとりいましたが、誰でしょうか？**

奈良時代、聖武天皇の娘が**孝謙天皇**でした。彼女が、**重祚して称徳天皇**となりました。

さて、天皇は斉明ですが、実質的には中大兄皇子と中臣鎌足が仕切っていたと思われます。斉明天皇は何をしたのでしょうか？

彼女の時代には、大規模な**後飛鳥岡本宮**を造営したり、3万人の人手で飛鳥の地に水路を掘らせたりしました。さらには、7万人を使って岡本宮の東に石垣を作らせました。

**「溝を掘るのに七万人、垣を巡らせるのに三万人」**といわれる大土木工事を行ったのですが、当然の

ごとく、土木工事にかり出される人たちの怨嗟の聲が沸き起こっていったことでしょう。何のために、こんな土木事業を行ったのでしょうか？目的が見えてきません。

蘇我赤兄が有間皇子に対して訴えた「3つの失政」とは、このことなんですね。「改新政治」といいながら、出来上がった難波宮を捨てて、飛鳥に戻って後飛鳥岡本宮を作らせたりするなど人民の負担が増加するようなことをしていったのは、まさに「失政」以外の何ものでもない、と言ってもいいのではないのでしょうか。

しかし、次の白村江の戦いの大敗北に比べたら、まだ「かわいい」と言えるかもしれません。

## 大失態＝白村江の戦い敗退

[1992年度の東京大学の入試問題](#)は、「白村江の戦い」を取り上げています。[塚原哲也先生のHP](#)の解説などを参照させていただきます。

7世紀以降、唐は律令による中央集権国家として基盤をかためながら、周辺諸国に圧倒的な影響力を及ぼしはじめました。そのため、朝鮮半島においても、高句麗や新羅が中央集権体制への整備を進めるなどして、国力の充実につとめていきました。そして、唐が高句麗に戦争をしかけると、朝鮮半島の緊張が一挙に高まり、新羅は唐に接近、新羅と対立関係にあった百済は日本との協調関係を深めていきました。

しかし、西暦660年、百済が唐・新羅の連合軍の進攻によって滅亡してしまいました。この後、[百済の鬼室福信](#)は日本の朝廷に援軍を求め、あわせて、日本に送られてきていた[王子豊璋](#)を国王に迎えて国を再興したい、と要請しました。

日本の朝廷はこれに積極的に応え、翌年豊璋に兵士を従わせて帰国させ、王位を継がせました。次いで翌662年には、百済軍に物資を送るとともに、みずからも戦いの準備をととのえました。

663年、朝廷はついに大軍を朝鮮半島に送り込み、百済と連係して唐・新羅連合軍に立ち向かい、白村江の決戦で大敗するまで、軍事支援をやめませんでした。

**百済が日本に支援を求めた理由は、一言で言えば滅亡した「百済国の復興」でした。**

そして、東大の設問は「このとき日本の朝廷は、なぜこれほど積極的に百済を支援したのか。下の年表を参考にしながら、国際的環境と国内的事情とに留意して5行以内で説明せよ」でした。

ここでは、年表などを割愛します。詳しく見たい方は、[塚原哲也先生のホームページ](#)を直接見てくだ

さいね。

では、「なぜ、日本の朝廷が百済を支援した」のでしょうか？

隋・唐の軍事侵攻により朝鮮半島の緊張が高まり、そのなかで高句麗や百済が倭との協調関係を強く求めるようになれば、倭が高句麗や百済を朝貢国（従属国）と位置づけて君臨することも可能です。たとえば天武・持統朝では、唐との対立関係から日本へ遣使していた新羅を朝貢国として扱い、新羅もそれを容認していました。ただ、唐との対立が解消されると新羅は対等の立場を主張して日本と対立するようになりました。

つまり、百済の滅亡は朝貢国（従属国）の消滅なんですね。それは是非避けたい。逆にいえば、倭の支援により百済が再興されたならば、倭は朝貢国（従属国）を確保し朝鮮半島への影響力を維持することができるわけです。

ですから、齊明朝（中大兄皇子や中臣鎌足）は百済を支援し、百済再興を通じて、朝鮮半島での影響力を確保しようと考えたのですね。

それだけではありません。国内の事情はどうでしょう。

大化の改新以降、急速に進められた天皇への権力の集中は、伝統的な勢力をもつ有力豪族や地方豪族に深刻な不安・不満をもたらしました。時の政権への批判が強まれば、どこの国でもいつの時代でも、政権を掌握する人たちは国内の人々の目を海外へ向けようとしています。つまり、対外戦争の遂行によって権力集中を図り、改新政治のなかで生じた豪族の不満を解消しようとしたのです。

ところで、齊明天皇は自ら水軍を率いて出陣しましたが、残念なことに齊明天皇は亡くなってしまいました。本来ならここで中大兄皇子が即位したいところですが、即位はせず皇太子のままで陣頭指揮を執ることになりました。

663年8月27日、28日に白馬江の河口付近で戦われましたが、倭軍は壊滅し、百済再興は夢と消えてしまいました。つまり、朝鮮半島の拠点を失ってしまったのです。それだけではありません。唐と新羅連合軍が、倭に攻めてくるかもしれないのです。急いで、対応策を決めなければなりません。

中大兄皇子はまず、防衛体制の整備を行いました。

対馬や壱岐、筑紫国に兵を駐屯させることにします。これが有名な〇〇です。さあ、〇〇に入る語は何でしょうか？

もちろん、防人ですね。

また、対馬や壱岐、筑紫国などに「烽火（とびひ）」を設置します。ここでは、昼間は煙を、夜は火

をたいて、もしもの時は都へ知らせるという準備を行いました。

さらに、大宰府の防衛のために、川をせき止めて「水城（みずき）」を建設しました。

百済からの亡命貴族の設計で、朝鮮式山城が各地に作られました。対馬の金田城、大宰府の大野城、讃岐の屋島城、難波の高安城などがそれにあたります。

つまり、白村江での敗戦により、朝廷では対外的な危機意識が高まります。敗退の原因（中大兄皇子の責任）を追及したりしたいところですが、唐や新羅が攻めてきたらやばい状況です。従って、水城や朝鮮式山城を築くなどの防衛体制の整備を進めていくことで律令制の導入が進んでいきました。そして、防衛体制の整備を含め、律令制の導入にあたって、百済からの亡命貴族の知識が活用されていました。

先ほど、東大の入試問題を紹介しましたが、実は、「白村江の戦いその後」の問題が2011年度に出題されています。

設問は「白村江での敗戦は、日本古代の律令国家の形成にどのような影響をもたらしたのか、その後の東アジアの国際情勢にもふれながら、5行以内で述べなさい。」というものです。

白村江での敗戦が律令国家の形成にもたらした影響が問われています。条件として、「その後」の東アジアの国際情勢にもふれることが求められています。

高句麗は唐によって668年に滅亡します。高句麗滅亡後には、朝鮮支配をめぐる新羅と唐が対立しました。この新たな情勢のもとで、新羅は日本に接近し、日本は新羅を服属国として位置づけて仮想の中華帝国秩序を整えました。

そのため、新羅とは頻繁に使節が往来することになりますが、唐とは高句麗制圧を祝う使節を派遣して以降、国交途絶状態になってしまいました。

そして、山川出版社の教科書『詳説日本史』に、白鳳文化が「新羅を経由し、8世紀には遣唐使によって伝えられた唐初期の文化の影響を受け」とあるように、新羅・唐の対立を利用しつつ、新羅を通じて先進文物を摂取したことが、律令国家形成に役立ったと考えることができます。

ちなみに、上記の「先進文物」とは何でしょうか？

山川出版社の教科書『詳説日本史』には「天武天皇によって大官大寺・薬師寺が作り始められるなど仏教興隆は国家的に推進され、地方豪族も競って寺院を建立した」とあります。

実は、寺院の建立は単に仏教の受容だけを意味するものではありません。瓦葺・礎石を使った建築技術

や仏像の彫刻技術といった新しい手工業技術を受容することでもありますし、僧侶や經典の整備も必要です。つまり、寺院の建立は先進文物の受容を象徴する行為だといえます。

では、こうした地方の豪族が独自に先進文物を受容する動きは、律令国家の形成とどのように関わっているのでしょうか？

塚原哲也先生の説明では、

律令支配が文書行政をともなうことであり、先進文物と一般化されるものには漢字文化も含まれること。

上記のことを念頭におけば、地方豪族による寺院の建立は、律令国家、つまり中央・地方に大量の官人をそろえ、文書行政をともなった中央集権的な国家体制の形成を、地方で支える基礎・受け皿の形成を意味する、と判断することができる。

ということなんです。

また、「白村江での敗戦は、日本古代の律令国家の形成にどのような影響をもたらしたのか、その後の東アジアの国際情勢にもふれながら、5行以内で述べなさい。」の解答ですが、塚原先生は以下のように答えておられます。

朝廷は、白村江での敗戦にともなう対外的危機に対処するため、百済の亡命貴族を登用した防衛政策を梃子とし、新たに朝鮮支配をめぐる唐と新羅の対立を利用しつつ、律令法に基づく中央集権化を進めた。一方、在地では豪族が大陸の先進文物を独自に受容する動きが進み、律令支配を支える基礎が地方でも形成された。

## 天智天皇の誕生

中大兄皇子は667年に、防衛上の観点から、飛鳥から近江国大津宮への遷都を行いました。そして、やっとと言うか遂に中大兄皇子は天皇として即位し、天智天皇が誕生しました。そして中臣鎌足が編纂したとされる『近江令』が制定されました。ただし、『日本書紀』にその記載がなく、『弘仁格式』の序文に登場しているだけなので、近江令の制定については疑問視されています。また、670年には『庚午年籍』が永久保存とされましたが、現物は存在していません。

また、671年（天智10年）正月、晩年の天智は新しい政府首脳を発足させました。メンバーを見てもみすと、大友皇子を太政大臣に任じ、蘇我赤兄を「左大臣」、中臣金を「右大臣」、蘇我果安・巨勢比等（こせのひと）・紀大人（きのうし）の3人を「御史大夫」としました。

このことに関して、倉本一宏氏は『蘇我氏～古代豪族の興亡』の中で次のように述べています。

重要なのは、天智が大友皇子の権力基盤として期待することができたのが、わずか4つの氏族の5人の官人に過ぎなかったという点である。大化年間には大臣を出していた阿倍氏大伴氏を筆頭とする中央有力豪族の多くや、ほとんどの王族、それに蘇我氏の中でも中心となる蘇我倉氏の連子系などは、この体制から疎外されていた。蘇我氏から二人選ばれているというのも、他の氏族の反発を増幅したであろう。

天智としてみれば、乙巳の変以来、中臣鎌足と少数のブレインのみを集めた「専制的権力核」を駆使して数々の政変を乗り切り、天智3年の蘇我連子の死からは大臣を置かず、自身と鎌足の二人による専制支配を続けてきた結果が、晩年に自己の王子の政権基盤として頼みにすることができる藩屏（はんぺい＝意味は皇帝・皇室の守護となること。また、その人。）が、これだけに過ぎないという事態につながったのである。

壬申の乱において、近江朝廷側がやすやすと敗れてしまった原因として、マヘツキミ層がすでに天智の代の段階で近江朝廷から離反していたということがあげられる。・・・・・・・・・・・・・・・・

そして、さらに次のように続けます。

晩年の天智が最も頼りにせざるを得なかったのが、数々の「謀反」事件で自己の手足となって謀略に荷担した蘇我氏であったと言うこと、それにも関わらず蘇我氏全体を権力に組み込むことはできずに、連子系の安麻呂によって掌中の大海人皇子を逃がしてしまったということ、（天智が大海人皇子を呼び出したときに蘇我安麻呂が「お言葉に用心なさいませ」と言ったという話：筆者注）せつかく大友皇子の周囲に組み込んだ蘇我氏の官人も藩屏として頼むにはあまりに結束力の弱い存在であったことなどは、天智の自己矛盾と苦悩、焦燥、それに近江朝廷の命運を象徴しているものである。

次号に続く